

# 先生はなんでメガネを掛けているの？

Salon de Thé



熊本市中央区  
医療法人 倭心会 眼科 かが たかひさ  
院長 古賀 貴久

1995年に熊本大学医学部を卒業後、同大学眼科に入局。1997年より武蔵野赤十字病院眼科に勤務。その後、1999年に熊本大学大学院に入学し、医学博士号取得。2005年から同大学講師を務め、米国・イリノイ大学シカゴ校客員研究員を経て、2009年に眼科かがクリニックを開院し、現在に至る。

「先生はなんでメガネを掛けているの？」—最近、よくこの質問を受ける。

当院は熊本市にある白内障手術、ICL手術に特化した眼科クリニックである。多焦点眼内レンズを用いた白内障手術にも積極的に取り組み、「裸眼で見える快適な生活を」というキャッチフレーズなのに、当の院長がメガネを掛けている姿を見ると不思議に思ったり、不審に思ったりするらしい。「本当はICL手術は危険だから、自分だけはメガネで過ごしてるんじゃない？」と勘繰られていたかもしれない。

副院長をしている妻がICL手術を受けたと言い出した。妻を執刀

するのは何となく乗り気ではなかったが、今では裸眼で快適な生活を送っている。15人いる職員も半数の7人が既にICL手術を受けた。このような情報も公開しているの、「院長先生はみんなの手術はできて、自分の目の手術はできないから仕方ないんだ」と勝手に納得してくれている人もいます。

私は52歳で、遠近両用メガネを40代後半から使用している。軽度近視(1.5D)のため、子供の爪切りはメガネを外したほうがよく見える。診療中はメガネを掛け外しするのは格好悪いと思っているが、自宅や院長室で雑誌を読むときはメガネを外したほうが楽だ。

近頃は40代後半から50代でICL手術を希望し来院する人も増えてきた。コンタクトレンズを常用している近くは老眼鏡に慣れている人は手術のよい適応だが、遠近両用メガネを使用している軽度近視の人は適応となりにくい。このような人には、

「私の目はあなたの目と同じで、メガネを外すと近くがよく見える。手術を受けると逆に近くは老眼鏡がないと見えにくくなるので、私はICL手術を受けていない」と説明すると納得していただける。多少はメガネを掛けているメリットもあるのかもと実感している。

多焦点眼内レンズで白内障手術を行なった術後に「伊達メガネを掛け

てもいいですか？」という不思議な質問を受けることがある。理由を尋ねると、人前に出るときは伊達メガネで顔のシミやシワを隠したいとのこと。

私自身40代の頃は、白内障手術を受けるときは絶対に多焦点眼内レンズで眼鏡フリーの生活をしたいと決めていた。最近でも、やはり多焦点眼内レンズで受けたいと思っているが、鏡を見るとシミやシワが分かる年代になり、伊達メガネを併用する考えに共感できるようになってきた。私が実際に白内障手術を受けるのは10年くらい先ではないかと思っているが、その時の自分がどう考えているのか楽しみだ。